

## キューバの音楽と観光

畑 陽子 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士後期課程 (音楽学)

---

### はじめに

2017年3月、筆者はキューバへ2週間ほど滞在した。本稿では、筆者が見聞きしたキューバの音楽生活を報告するとともに、キューバにおける音楽と観光との関連について述べる。

### 1. キューバの観光業

2015年の、米国との国交回復をきっかけに注目度が上昇し、キューバへの外国人観光客はここ数年でかなり増加したようだ。トロントからのハバナ行きの飛行機には外国人観光客が多数搭乗していた。

キューバは1902年、実質米国の占領下となる形でスペインから独立を遂げた。1959年に革命が起きるまでは、米国の人々のリゾート地として多くの観光客を迎え入れていたが、1960年代の米国との国交断絶と周辺諸国からの孤立により外国人の入国は激減する。しかし1990年代の経済危機をきっかけに、キューバが観光産業に本格的に着手したことによって、徐々にヨーロッパからキューバ観光ブームの波が広がっていった。日本でも、近頃雑誌やテレビ番組でキューバの特集が組まれることも少なくない。そこで紹介される社会主義国家キューバに暮らす人々は、貧しくとも音楽と笑顔を忘れない、お金は無くとも心の豊かな暮らしをする人々であり、そこで紹介されている文化や音楽も、観光客に向けたものがほとんどである。

筆者はキューバ滞在中、カサ・パティクルル Casa particular<sup>1</sup> と呼ばれる民宿に宿泊した。これはキューバの一般市民の家に宿泊できるものであり、ホテルに宿泊するよりはキューバ市民の生活を間近で見ることができる。しかし、外国人を泊らせることのできる(政府の許可が必要)家庭はキューバ市民の中でもかなり裕福な暮らしをしている。キューバは社会主義国家のため、貧富

の差は無いと思われていることがあるが、観光業が盛んになり、キューバ市民が外貨を所持・使用することができるようになってからは、特に貧富の差が大きくなっている<sup>2</sup>。外貨は、観光業に従事できる人々が多く手にすることができるのだが、その割合は白人系が大きく占めている。

## 2. 音楽事情

筆者は今回、キューバの首都ハバナと、第二の都市サンティアゴ・デ・クーバに滞在したが、本稿ではハバナについて述べる。ハバナでは、ベダード（主に白人系の人々が住む）、セントロ・アバナ（主に黒人系の人々が住む）、旧市街（観光客向けの店や施設が多い）を行き来した。それぞれの地区で耳にする音楽は若干異なり、セントロ・アバナではレゲトン<sup>3</sup>、旧市街ではサルサやソン<sup>4</sup>を路上やタクシーの中でよく聞いた。ベダードでは、あまり路上で音楽を聞くことはなかった。

### (1) ベダード

高級住宅街や高層ビル、観光ホテルの立ち並ぶ地区で、大使館などの施設、学校や大きな病院も多い。劇場は多数あるが、路上での音楽生活はあまり見ることが出来なかった。劇場では、フェスティバルシーズンであったこともあり、連日イベントや公演が行われていた。

フィエスタ・デル・タンボール Fiesta del Tambol（太鼓の祭り）のイベント（写真1）やパーカッション・コンクール、また、レイセス・プロfundas Raices Profundas という舞踊団による演劇上演も行われていた。

レイセス・プロfundasはサンテリア santería（または Yoruba Yoruba）<sup>5</sup> と呼ばれるキューバの信仰を舞台化した公演を行っている（写真2）。レイセス・プロfundasは、パタキと呼ばれる言い伝えを物



写真1 フィエスタ・デル・タンボールでのルンバ

語の軸に、儀式に用いられる歌、太鼓演奏、踊りを取り入れて舞台を制作している。このような宗教儀式の芸術化、舞台化の動きは、国立民族舞踊団などにも見られる。

これらのイベントには、現地のキューバ人と観光客が半々程度に見られたが、入場料や会場の様子から、比較的裕福な層や音楽関係者が訪れていたと思われる。



写真2  
レイセス・プロfundasによる舞台

## (2) セントロ・アバナ

セントロ・アバナの路上やメルカド（野菜や果物を売る市場）では、キューバの人々が日々どのような音楽を聞いているのか窺えた。セントロ・アバナの、特に南側の黒人居住区には観光客はあまり訪れないのか、筆者に対して珍しそうな視線を感じた。路上やメルカドでは、各々好きな曲をかけているのだが、その中でも目立ったのはレゲトンだった。キューバ人アーティストによるマイナーな楽曲が多かったが、全米チャートに入っているようなメジャーな楽曲も時折聞こえてきた。筆者の宿泊したセントロ・アバナのカサの隣にはメルカドがあり、毎朝レゲトンが聞こえてきた。



写真3 カジェホン・デ・ハメルでチップを集める出演者

一方同じセントロ・アバナでも、カジェホン・デ・ハメル Callejón de Hamel（「日曜ルンバ<sup>3</sup>」で有名）は観光スポットとなっており、欧米からの観光客がつめかけていた。もはや市民の集いではなく「観光ショー」に近い形でダンスや演奏が行われていた。ルンバだけでなくサンテリアの舞踊が演目として行われ、司会者が一部英語で進行をしていたのも印象的だった（写真3）。

### (3) 旧市街

旧市街では、サルサやソンが、他の地域と比べて圧倒的に多くかかっていた。レストランやホテルのラウンジ、路上でもライブが行われていた。彼らにとって観光客からのチップは重要な収入源となっている。多くの観光客はキューバの伝統的なソンやその発展形のサルサを楽しみにキューバへ来るようだ。私に話しかけてきた現地の青年が「サルサが聞きたいんだろ?」と言ったので、私が「レゲエやレゲトンが好きだ」と答えると「あんたはよく分かってるね!」と返してきた。先述のように町ではレゲトンが頻繁にかかっており、CDショップ<sup>7</sup>にも、レゲトンやヒップホップのコーナーが充実していた(写真4)。ソンやサルサは、現地の若者たちにとっては時代遅れの音楽になっているのかもしれない<sup>8</sup>。



写真4  
海賊版CDを販売する店

### おわりに

ソ連崩壊による経済危機を乗り越えたキューバは、まだ経済的に裕福な国とはいえない。観光業を重要な収入源にしており、国の投資も観光業中心、また音楽芸術も観光業の一部となっている。

キューバ人の平均月収は日本円で約3000円、医者でも7000円～9000円である。一方で、観光客を泊めるカサは1泊大体1500円～2500円、観光客向けに行われるダンスのレッスンは1時間大体1500円～2500円。観光客に「1ドルちょうだい!」とねだる子供がいるが、彼らがそれに成功すれば、親の日給を上回る。社会主義キューバでは、最低限の食料品や日用品が支給される制度があるものの、それだけでは足りないのだと言う。

建物の修繕や道路工事も、観光地を優先に行われているようだ。ベダード地区には立派なホテルが立ち並び、旧市街の建物も修繕されているのに比べ、セントロ・アバナの道路は何年間も工事中だと聞いた(写真5)。半壊、全壊している建物も何件も見られた(写真6)。



写真5 工事中の道路



写真6 倒壊する建物

キューバは、豊富な「観光資源」に頼って90年代の経済危機を乗り越えた。私たちが思っている以上に、彼らは音楽を「観光資源」として売っている。観光資源としての音楽が、観光客の期待により応える形(より分かりやすいキューバの表現)になることは言うまでもない。多くの観光地でサルサやソンが演奏されるのはそのためであり、また、そのことは私たちの求めるキューバのイメージは革命前のリゾートで止まっていることを示している。

キューバの人々は、自分たちのアイデンティティや音楽にかなり強いこだわりを持っている。自分たちが「キューバ人」であるということ、またある音楽が「キューバ音楽」であるということを彼らはしきりに強調した。人種や世代などによって嗜好が異なる一方で、「キューバ」という共通の意識を持っている。スペインとアフリカという、外来の要素が長い月日をかけて溶け合い、新たに構築された「キューバ」は、外部者の目に触れることでその独自性を増していく。そのような中、市民の間では新たな音楽がどんどん誕生し、また発展している。ソンやサルサはもう古いと言わんばかりに、若者たちはティンバ<sup>9</sup>やレゲトンをガンガンかける。しかし、どんなに新しいものであっても、彼らの音楽には必ずどこか伝統的なキューバの音楽の「サボル sabor<sup>10</sup>」が感じられる。新たなジャンルと伝統的なジャンルが融合することも、キューバではごく自然にある。変化すること自体すらキューバの伝統であるかのように、彼らの音楽は形をとどめない。それにもかかわらず、受け継がれ続ける「キューバラしさ」とは一体何なのだろうか。何がそう感じさせるのだろうか。

[注]

- <sup>1</sup> 日本語で「民家」の意味。
- <sup>2</sup> キューバでは二重通貨制がとられており、キューバ市民は主にキューバペソ（CUP）を、外国人はキューバドル（CUC）を使用する。外国人の使用するドルはペソの何倍もの価値があるため、外国人観光客向けの合法・非合法のあらゆる商売が行われている。
- <sup>3</sup> レゲエやヒップホップと類似する音楽ジャンルで、1990年代以降生まれた新しいジャンル。特に20代以下の黒人系の若者に人気がある。
- <sup>4</sup> ソンは19世紀ごろ生まれたキューバの国民的音楽ジャンルであり、今日まで様々に変化しながら発展を続けている。サルサは、ソンがプエルトリコや米国で発展したもので、両ジャンルは相互に影響し合っている。
- <sup>5</sup> 西アフリカに起源を持つ信仰と、カトリックが合わさったキューバ独自の信仰。
- <sup>6</sup> 毎週日曜日に市民が集いルンバ rumba と呼ばれる娯楽のダンスを行う。歌、太鼓などの打楽器を伴う。
- <sup>7</sup> 正規品の販売ではなく、家庭のパソコンで焼いたような海賊版CDが堂々と店を構えて売られている。
- <sup>8</sup> もちろん好みは個々様々だが、世代や人種によって傾向がある。私の滞在したカサの白人系老カプルはレゲトンを嫌っていたし、私がルンバなどの黒人系の伝統的なダンスを習いに出かけるのすら良く思っていないようだった。
- <sup>9</sup> ソンの発展系とされる音楽ジャンル。サルサ、レゲトンだけでなく、ヒップホップやR&Bをはじめ実に様々な音楽ジャンルの要素が取り入れられており、音楽的に非常に多様である。
- <sup>10</sup> スペイン語で「味」の意味。音楽で用いる場合は「(良い)ノリ」や「旨み」というニュアンスを持つ。